広告　企画・制作／読売新聞社広告局

熱心に耳を傾ける参加者たち

公益財団法人SGH財団　第15回市民公開講座

～大切な誰かを支えたい～

こんなに進んだ 大腸がん診療！

日本人の２人に１人が診断されるというがん。中でも大腸がんは罹患率１位、死亡率が肺がんに次いで２位と、特に増えているがんです。公益財団法人ＳＧＨ財団が主催する「こんなに進んだ大腸がん診療！」と題した市民公開講座が、２月26日（日）、大阪市北区のグランフロント大阪で開催されました。講演では、大腸がんの予防・診断、内視鏡、手術、薬物療法の最新情報を各分野の専門医が解説。続くパネルディスカッションでは来場者から寄せられた大腸がんの現状や新たな治療法に関する質問に回答しました。

基調講演

「大腸がんとは?」

森 正樹 氏（大阪大学医学部消化器外科教授）

生活見直し 年1回検査

大腸がんは、肛門につながる直腸と、その手前の長い部分、結腸にできるがんを指します。部位ごとに見た罹患率は男女合わせて1位、死亡率は2位で、大腸がんの発見率は年を取るごとに増えていきます。早期に見つかれば5年生存率は95％ですが、進行すると腫瘍は徐々に大きくなり、リンパ節や肝臓、肺などに転移していきます。便に血が混じる、貧血、便通が変化するという自覚症状は早期には表れません。40歳以降は年1回の検査を受けて、早期で見つける工夫と努力が必要です。検査の基本は、便を採取して血が混じっていないか調べる便潜血検査です。陽性の場合は肛門からカメラを入れる内視鏡検査に進みます。ポリープや早期のがんなら、内視鏡で取ることが可能ですし、手術をする場合も腹腔鏡を使うことで、傷の小さい手術ができるようになっています。

国立がん研究センターが「がんを予防するための12か条」を出しています。特に大切なのが、「お酒をほどほどに」「たばこをやめる」という項目です。バランスの取れた食事や適度な運動も取り入れて予防に努めましょう。治りにくいがんに対する研究も急がれます。リンパ球ががん細胞を見つけて攻撃できるようにする「がん免疫療法」が注目を集めていますが、大腸がんに効果があるかどうかはまだわかりません。抗がん剤や放射線の効きにくいがん細胞を攻撃する方法も探り、がんを根本的に治すという目標に向かって研究を進めています。

専門3医 講演

「大腸がんの診断と内視鏡による優しい治療」

田中 信治 氏

（広島大学病院内視鏡診療科教授）

早期なら内視鏡で完治

内視鏡が治療を担当するのは、粘膜内を主体とし筋肉の層まで到達していない早期がんです。大きく分けてポリープ型と平坦型の2種類があり、一般的にポリープ型は大きい割にゆっくり発育し、浸潤や転移の能力も低い一方で、平坦型は小さいうちに浸潤や転移する悪性度が高い傾向があります。内視鏡はとても進歩しているので、平坦な病変もわかりやすく早く見つかるようになってきました。カメラ付きのカプセルが体内を移動する大腸カプセル内視鏡も開発されています。

代表的な治療法は、内視鏡の先端から輪っかを出してポリープをつかみ、電気で焼き落とす「ポリペクトミー」、平坦な病変の下に生理食塩水を注入してポリープ状にしてから切除する「内視鏡的粘膜切除術（ＥＭＲ）」、粘膜を切開してその下の粘膜下層から剥離する「内視鏡的粘膜下層剥離術（ＥＳＤ）」です。特にＥＳＤは、大きさにかかわらず病変を一括で取ることができると話題の治療法です。いずれにしても早く見つければ内視鏡だけの優しい治療で大腸がんは完治します。ぜひ恥ずかしがらずに内視鏡検査を受けてください。

「最新の大腸がん手術～美しく優しい手術～」

竹政 伊知朗 氏

（札幌医科大学
消化器・総合、乳腺・内分泌外科学教授）

腹腔鏡 痛みや傷少なく

かつての大腸がんの手術は、約30㌢の大きな傷が残るものでした。腹腔鏡手術の発展により、約3㌢の傷と数か所の小さな穴だけで、ハイビジョンカメラが映し出す映像をモニターで見ながら手術ができるようになりました。がんが存在する脂肪を包む膜を破らないように、神経や血管を傷つけず、少ない出血でがん組織を取り除きます。最新の技術により転移のあるリンパ節を緑色に光らせることで、切除すべき組織と残すべき神経や重要な血管を的確に認識できるようになり、特に直腸がんの手術で有用です。

現在、がん手術に占める腹腔鏡手術の割合は半数以上。さらに優しく低侵襲な手術を目指して、単孔式の手術に取り組んでいます。傷はへその内部のみとなり、一見手術したとはわかりません。「ダヴィンチ」というロボットによる手術も導入しています。手術機器をロボットで操作するため、人間の手よりぶれが少なく繊細な手術ができます。大腸がんの手術で大切なのは根治性と安全性です。この二つをしっかりと担保した上で、性機能、排尿機能、排便機能を残し、なるべく痛みが少なく傷が目立たない手術をするための取り組みを進めています。

「大腸がん化学療法と自分らしい生活の両立」

工藤 敏啓 氏

（大阪大学医学部
先進癌薬物療法開発学助教）

患者に合う薬 使い分け

大腸がんの患者さんが自分らしい生活を送るために必要なのは、科学的に正しく、満足度が高い治療です。治療のデータが多く豊富なエビデンス（科学的な根拠）があっても、患者さん自身の望みではなかったり、避けたい種類の副作用が出たりしてはＱＯＬ（生命・生活の質）が高いとはいえません。抗がん剤治療の目的を考えることが大事です。「治してほしい」「とにかく長生きしたい」というのは当然の思いですし、「もうすぐ孫が生まれるからそれまでは」など、明確な目標を持つ方も多いです。目的は治癒なのか、延命なのか、症状緩和なのか、主治医としっかり話し合いましょう。

２０００年以降、抗がん剤の種類が増えたことで、生存期間の中央値は11か月から30か月へと延びました。切除不能の大腸がんでも、さまざまな薬を使い分けながら手術と組み合わせて治療を続けることが可能です。「延命と引き換えにずっと副作用で苦しむ」という従来のイメージは必ずしも当てはまりません。副作用を上手にコントロールしつつ、患者さんの生活に合わせた治療を組み立てられるようになっているのが、今の抗がん剤治療なのです。

閉会のあいさつ

コーディネーター

平岡 真寛 氏　公益財団法人ＳＧＨ財団理事
日本赤十字社和歌山医療センター院長
京都大学大学院医学研究科特命教授

がん撲滅の一助に

公益財団法人ＳＧＨ財団第15回市民公開講座「こんなに進んだ大腸がん診療！」、お楽しみいただけましたか。大腸がんの予防・診断、内視鏡による診断・治療、手術、薬物療法の最新情報をご理解いただけたのではないかと思います。わかりやすいお話をしてくださった田中先生、竹政先生、工藤先生、プログラムの企画・運営にも尽力された森先生に厚く御礼申し上げます。がんは今や、文字通りの国民病です。その撲滅の一助として、ＳＧＨ財団は引き続きこのような市民公開講座を続けていきたいと思っております。皆様のご支援、よろしくお願いいたします。

パネルディスカッション　会場からの質問と回答

司会＝森正樹氏　パネリスト＝田中信治氏　竹政伊知朗氏　工藤敏啓氏

――大腸がんが増えている原因は。

田中　大きく二つの要因があります。食生活が欧米化したこと、日本が長寿国であるため年齢が高くなるほどがんのリスクが上がることです。患者の男女比が１：１で他のがんに比べると女性も多いため、便秘が原因なのかとよく聞かれます。しかし、それが直接のリスクになるというエビデンスは今のところありません。

――腹腔鏡手術ができない場合がありますか。

竹政　現在も３～４割は開腹手術です。腹腔鏡手術はメリットがある反面難易度が高く、腫瘍の部位や術者の技術によってはできないこともあります。また、局所をクローズアップするので、大きな視野で見ることがやや苦手です。がんが他臓器に直接浸潤したり、遠隔臓器に転移したりしている場合は、腹腔鏡手術では不十分な治療になる可能性があり、開腹手術となることがあります。

――抗がん剤と手術を組み合わせる治療について教えてください。

工藤　世界各地でガイドラインが作られ、抗がん剤でがんを小さくしてから手術するという考え方が以前にも増して強くなっています。手術ほどの根治性は望めませんが、手術できる状態を作れるのは抗がん剤の大きな武器です。さまざまな治療法を組み合わせるのが、今の大腸がん治療の主流です。

森　外科医も抗がん剤の知識が必要ですし、抗がん剤の専門家もどのタイミングで手術をするか判断するための知識が必要になってきました。医師たちは、自分の領域にとどまらず知識を深め、患者さん一人一人にとってどんな治療がベストなのか話し合わないといけませんね。

公益財団法人 SGH財団は、国際的で活力ある社会の創造に向け、多面的かつ幅広く社会活動に寄与することを目的としています。

SGH財団は、東南アジア諸国からの外国人留学生に対する支援事業、がんに関する基礎研究及び応用治療研究に対する助成・褒賞等の支援事業、経済・産業活動を支える運輸・物流に関する支援事業を行っております。

本財団の事業の一つであるがん研究振興事業は、平成元年より、医療福祉の向上に寄与することを目的に「がん」の基礎研究と応用研究の研究開発に対して助成を行って参りました。また、平成15年度にがんの研究者及び医療従事者の励みとなることを目的として、SGH特別賞、SGH看護特別賞を設け、平成14年度からは、一般市民の方々を対象として、「がん」の予防、診断、治療に関する最新情報を分かりやすく紹介する市民公開講座を毎年開催しております。

がん研究振興事業

がんに関する基礎研究及び応用治療研究に対する助成・褒賞等の支援事業を行っています。

■ SGHがん研究助成

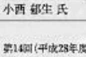
がんの基礎及び臨床における優れた研究を対象とし、若手研究者の育成を目的として、平成元年度より、助成を行っています。

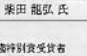
第28回（平成28年度）SGHがん研究助成　15件

■ SGH特別賞

がんの基礎、臨床研究に顕著な功績を挙げ、かつ今後の発展が期待される方を対象として、表彰を行っています。

第14回（平成28年度）SGH特別賞受賞者


小西 郁生 氏


柴田 龍弘 氏

[illegible]「新風」
[illegible]氏作

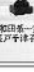
■ SGH看護特別賞

がんの予防・医療・看護に対する研究業績が顕著で、将来も活動が継続され、その成果が期待される個人または団体を対象として、表彰を行っています。

第14回（平成28年度）SGH看護特別賞受賞者

NPO法人マギーズ東京
代表者：秋山 正子 氏

安藤 詳子 氏


[illegible]「[illegible]」
[illegible]氏作

留学生奨学事業

日本の大学に在学する優秀な東南アジア諸国（ASEAN）からの私費外国人留学生に対して奨学金支援を行っています。

- 奨学金支援（給付型奨学金）
- 奨学生交流支援
  - 奨学生交流会
  - 卒業奨学生同窓会

国際経済協力事業

中古トラックの寄贈及び車両整備技術研修生の受け入れ、物流に関する高度教育機関への専門家派遣や人材育成を行っています。

- 車両・整備機器寄贈
- 物流人材育成支援
  - 車両整備技術研修
  - 物流講座開設

〒600-8009
京都市下京区函谷鉾町79 ヤサカ四条烏丸ビル9階
公益財団法人SGH財団
TEL：(075)255-9310　FAX：(075)255-9311
E-mail：info_cr@sgh-foundation.or.jp
URL：http://www.sgh-foundation.or.jp